一人ひとりを大切にする保育を目指して　－ある子どもの姿を通して－

*新堂満千子、*加藤　望、*小泉江美、*竹村(崎山)峰世、*植田登世子、
*橋本眞規子、　*長井幸恵、　*、**藤原　剛、***髙田利武

Education forcusiong on the total personality of each individual child

- Two case studies -

Machiko Shindo, Nozomi Kato, Emi Koizumi, Mineyo Takemura (Sakiyama), Toyoko Ueda, Makiko Hashimoto, Sachie Nagai, Tsuyoshi Fujiwara and Toshitake Takata

要　旨

奈良大学附属幼稚園は「一人ひとりを大切にする保育」をめざしている。この報告では、母親の過保護・過干渉を受けて育ち、自己中心の世界に浸り、他児には無関心なM男と、遊びに入れずただウロウロしているだけのY男という二人の子どもの姿を通して、一年間の保育の過程において実践し、経験したことについて考察した。特に、この二人の個性はどのようなもので、友達との関わりがどのように変化していったか、その中で教師はどのように関わり援助していったかを中心にして、一年間の姿を振り返りつつ考察した。　日々の保育の実践の中で、教師は子どもとともに生活をし、一人ひとりの子どものありのままの姿を受け止め、子どもとともに共感し、信頼関係を作ることが最も大切であることが感じられた。また、一人ひとりの子どものより良い成長のためにその子に合ったきめ細やかな教育的配慮・援助が必要であるが、そのためには一人ひとりの発達が著しく異なる幼児期の特性を十分に踏まえた上で、一人ひとりの子どもの特性を見極め、洞察し、理解することが重要であり、教師が心のゆとりを持って臨むことが必要であった。同時に、子どもに大きな影響を与える保護者と信頼関係を築き、共通理解の上に立って子どもの育ちを支え合っていくことも非常に大切であると考えられる。

I. はじめに

幼稚園の集団生活の中で、一人ひとりの幼児が「その子らしさ」を発揮しながら、友達との関係を発展させ育ってゆく中で、様々な問題が起こってくる。自己中心的で友達との関係を作れない子、友達との遊びになかなか入って行けない子、子ども同士の自己主張のぶつかり合い

平成11年9月29日受理 *奈良大学附属幼稚園　**教養部　***社会学部

など、その姿は様々であるが、その姿には一人ひとりの子どもの思いや関心が映し出されているのではないだろうか。

そのように様々な姿を見せる幼児の中で、教師は幼児の思いをどのように受けとめ、どのように配慮、援助してゆけばよいのであろう。幼児は、いつも側で自分を暖かく見守って自分の思いを受け入れてくれる教師がいる、そして自分を守ってくれる教師がいるという安心感のもとでこそ、自分を発揮できるのではないだろうか。教師は、子どもの言動や心の動きを暖かく受けとめることを通して、その子の特性を見極めながら集団生活が出来るよう援助してゆくことが大切である。

ここでは、母親が過保護・過干渉で、自分中心の世界で遊び他児には無関心なM男と、遊びに入れずただウロウロしたり眺めているだけのY男という二人の子どもの姿を通して、この二人の個性はどのようなもので、友達との関わりがどのように変化していったか、その中で教師はどのように関わり援助していったかについて、一年間の姿を振り返って考察する。

Ⅱ. 実践

M男とY男についてのその実態と実践の結果をそれぞれケースについて個別に述べる。実践の記録は園児の発達の段階に応じて１ヶ月から数カ月毎に分け、その特徴を表すタイトルを付けて表に示した。本文ではその期間中に認められた特徴的な事項を数項目にまとめて述べた。

A.　M男のケース

＜実態＞

1．年齢　3年保育　5才児　　クラス人数　男１５名　女１４名　　計２９名

2．学級集団全体の実態

- 進級組２クラスの混合クラスである。
- 男児女児と隔たりなく大勢で仲良く遊ぶことが出来る。
- おしゃべりが多く話を聞くときもウロウロしたり、騒いだりする園児が多いので、話を聞くことの楽しさ、大切さを知ってもらうため、指人形やパネルシアターなどを使い話をすることが多い。
- M男の言動や反応に対して他の園児は少し戸惑っている。

3．個の実態

- 父　母　本人の３人家族
- ３才児の頃のM男
  - 体格がよく、入園時の身長１０９．２cm、体重２９．０kg
  - 就園前は同年齢の子どもと遊んだ経験は乏しく、母親と二人の時間がほとんどであった。
  - 語彙は豊富であるが幼児音である。
  - 大人のなかで過保護に育てられ、基本的生活習慣は身についてない。

- 何もかも初めての経験で楽しくて仕方がないようであり、好奇心旺盛で、興味関心のまま動き、友達と関わっての遊びを好む。
- 友達に手を出したり泣かせたりすることはなく、むしろ他児にされるがままである。
- 子どものトラブルで母親同志の問題が起こる。
- 遊びにM男独自のイメージがあり「おばけの世界」「かんおけごっこ」等、一人での遊びが目立つようになる。
- 他児に対して優しい気持ちを持っていて、泣いている友達を見るとティッシュペーパーで涙を拭いたり慰めたりしている。

・4才児の頃のM男

- 母親が育友会の役員になり幼稚園に出向いてくる日が多くなる。
- 友達とのトラブルが多くなる。押したり友達の物を取ったりするがこれはM男にとっては遊びの延長でもあるのだが、他児には理解出来ない。
- 感性が豊かで、自分の気持ちを素直に表現する。
- 自分の気持ちを押さえ切れない時があり、突発的に叫んだりおばけの世界に逃避しようとする姿が見られる。

＜実践＞

表－1．母親の保護と自分中心の世界：朝の身支度・製作の様子（4～5月）

M男の姿	周りの幼児の姿	教師の援助	親との関わり		反省・省察
			親とM男	親と教師	
・登園時の身の回りの整理は全部母親まかせである。	玄関で親と別れ一人で保育室にやってくる。	玄関でM男が来るのを待ち「一緒に行こう」と声をかける。	毎日M男と一緒に2階の保育室までついて来てM男の世話をする。	「M君は自分でできますよ、みていてあげて下さいね。」とお願いする。	まず母親との話し合いが必要だ。M男の様子を伝えながら親と教師が同じ気持ちでM男と関わっていかなければならない。
・一人でやろうとするが色々な事に興味を持つので時間がかかってしまう。	身の回りの整理は自分ですることができる。		M男の持ち物はいつも母親が持ちM男の後を追いかけている。	教師の依頼に対し「今日はちょっと..」など理由をつけては保育室に入って来る。	
・教師や友達の言葉がけに「うるさい。」「分かってる。」と言いながらそのままの状態で遊んでいる。	身の回りの整理ができると好きな活動で遊ぶ	「M君、先に着替えしてからゆっくり遊んだらどうかな。」と声をかける。	「早くしなさい。」「どうしてそんなに遅いの。」と言いながら教師が見ていない所で手伝っている。		
・スモックの着替えがスムーズにできず怒って泣いている。	M男が泣いている事を教師に言いにくる。	M男が着替えやすいようにスモックを持ったりボタンかけを手伝ったりする。		袖ぐりの補正をお願いする。	スモッグの袖ぐりが小さすぎるようだ。もう少し大きく補正してもらう必要がある。
・一人で保育室に来て身の回りの整理もできるようになってきたが時間がかかる。	「M男、一緒に保育室に行こうよ。」と誘っている幼児もいる。		M男が保育室に入っていくか心配そうに見ており、友達との一寸としたトラブルがあると走ってきて相手の友達に厳しく注意をする。	「私や友達が2階まで一緒に行きますので大丈夫ですよ。ご安心下さい。」と声をかける。	母親が保育室まで来る一番の理由は、他のクラスの子供から“デブ”と言われないよう守りたいからのようだ。

・粘土や空き箱を使って蛇やお化け等を作る。友達とは全く関わろうとしない。	自分の好きな遊びをしている。	教師には自分の好きなこと（お化けや魔法など）について話をしに来るので、関心を示し魔法等について話をする。			
・母の日のプレゼント作りをする。気に入らないことがあったり、思い通りにいかないと、教師に八つ当たりするように話しかけてくる。 「あー嫌だ。どうしてこんなの作るんだ。」	製作を嫌がり、暴れているM男をジーと見ている	色々お母さんの話をしながら、一緒に作る。			お母さんにプレゼントしようという気持ちが生じていないのでは。 もう一度M男に話してみようと思う。 床に座るのがしんどいようだ。

・母親が保育室まで入って来ることが多いが、それは“M男を守る”という気持ちからのようである。しかし、トラブルが生じた時に“M男が自分で解決できる”ようにしていかなければならない。そのためには母親の気持ちを受けとめるとともに協力してもらう必要がある。

・友達とは全く関わりを持とうとせず、「お化け」や「魔法」など自分の好きな世界に閉じこもって一人で遊んでいるようだ。その閉ざされた世界を母親が守っている面があるのではないだろうか。

・まず母親と教師の信頼関係を作ることが必要だ。話（M男の様子を詳しく伝える）をする機会を多く持ち、母親と教師が同じ気持ちでM男と関わっていかなければならない。

表－2．友達への関心の芽生え：プチトマト植え・内科検診（5月）

M男の姿	周りの幼児の姿	教師の援助	親との関わり		反省・省察
			親とM男	親と教師	
・“植物”“人のからだ”の図鑑に興味を持ち、発見した事などを友達や先生に伝える。	「M君、よく知っているなあ」「難しそうな本やなあ、すごいなあ。」と感心している。	絵本棚の図鑑を、見やすいように整理しておく。 「先生だけじゃなく、お友達にも教えてあげたら？みんなびっくりすると思うよ。」と声をかけM男と一緒に友達の所に行く。	母親はいつもM男の興味を示す事に協力的である。	M男が“植物”“人のからだ”に興味を持っている事や、それを通して友達との関わりが増えてきている事を伝える。	植物や人のからだについて興味を持っているようだ。色々な教材を用意しようと思う。
・友達や先生とプチトマトの苗を植える。	プチトマトについて、みんなで話し合いをする。				
プチトマトについてみんなの前で発表する。	教師の質問に対し「M君に聞いてみよう。」と言ってM男の所に行く。	M男がみんなの前で発表できる場を作って、「M君は先生よりよく知っているね。これからはM君に聞いてみようね。」「恥ずかしがらずに発表できるなんてM君すごいね。」とみんなに伝える。		M男が人前で恥ずかしがらず発表できる事を話し誉める。 みんなの前で発表した事がきっかけで友だちとの関わりができてきた事を話す。	M男は人前で恥ずかしがらずに発表できるのでみんなの前で発表する場を作ってみようと思う。 M男は自分の話しをみんなに聞いてもらって嬉しそうだ。

・内科検診を受けたのを機会に、人のからだについて発表したり、友達の質問に張り切って答える。	M男の発表を聞いたり質問したりする。	発表だけでなく“質問コーナー”を作る。			今度は友達と会話ができるように“質問コーナー”を作ってみよう

・M男は人前で恥ずかしがらずに発表できるので、友達の前で発表する場をたくさん作った。特に“植物”“人のからだ”について興味がありよく知っていたので張り切って発表していた。

・友達や先生が自分の話しを楽しそうに聞いてくれたことや、みんなが自分と同じことに興味を持っているということを知り嬉しかったのだろう、積極的に友達に話しかけるようになってきている。

・“質問コーナー”を作ったことで、友達と会話をする、友達の話を聞くという機会も増え、自由遊びの時も友達との会話が目立つようになってきている。ただ、今は自分の興味のあることだけでしか会話にならないので、どんなことにも興味を持ち友達の話しを聞いたり会話ができるようになってほしい。

表－3．自分中心の世界：自由遊び“みんな悪魔だ”（6月）

M男の姿	周りの幼児の姿	教師の援助	親との関わり		反省・省察
			親とM男	親と教師	
・自分の使いたい道具を友達が使っていると「お前は悪魔だ。」「いつか地獄に突き落としてやる。」などと言いながら泣いて暴れる。	聞いた事もないような言葉ばかりで返事に困っている。	M男の話をよく聞き受けとめながらも、集団生活においての様々なルールについて話をする。			遊びなど色々な場面を通しながら集団生活での基本的な事が身についていくといいのだが最近トラブルが多いように思う。
自分の使っている遊具は絶対貸そうとしないで「全部俺の物だ」と言って友達を叩いたり、遊具を投げたりする。	何回言っても貸してくれないしM男がすぐ怒るので、M男と遊んでいても長続きしなかったり、関わろうとしない。		「意地悪する子はみんな敵よ。」「○○君と遊んだらダメ。」などとM男に言い聞かせている。 教師に他の子供や親の悪口を言う。	M男の様子を話しながら、家での遊びや言葉使いについて聞いてみる。	M男に対し少し口やかましくなりすぎているのではないだろうか。M男に今一番分かって欲しい事，大切な事は何だろう。
教師に対しても「うるさい奴だ。家に火をつけて丸ごと燃やしてやる。」「鎖をつけて海に沈めてやる。」と言って話を聞こうとしない。 泣き叫んでいた声が小さくなり、教師の顔をジーっと見つめる。		教師の立場からではなく一人の人間として自分の気持ちを言った。「何でそんなことを言うの？　M男にそんなことを言われて悲しいわ。」			思わず自分の気持ちをストレートにぶつけたが、M男に何か変化があったように思う。 M男は感性豊かな子なので、教師の気持ちは通じたと思う。 自分の言葉で相手が悲しい気持ちになることを、少し分かったようだ。

教師と落ち着いて話をしていくうちに少しずつ相手の気持ちになって物事を考えるようになる。	M男の様子や言葉遣いの変化に気づく。	“悪魔”と言われたらどんなに悲しい気持ちになるのか相手の気持ちになって考えるよう声をかけ、M男の手を握りながら一緒に考える。	“悪魔”“地獄”という事に関しては「ビデオの影響でしょう」とあまり真剣に考えていない様子である。		家庭訪問の時も、“お化け”“魔女”“呪い”などに興味をもって遊んでいた。M男は“悪魔”“地獄”という言葉をどこで知りどういう気持ちで使っているのだろう。

- 他児に比べM男は集団生活での基本的なことがほとんど身についていない。そのことばかり気になり口やかましくなりすぎたように思う。M男自身の状態をみて、M男の気持ちや思いを受け止め、温かく関わっていくことも忘れてはならない。M男には、自分の言葉や行為が他の人をどんな気持ちにさせるか分かっていなかったのではないだろうか。
- “悪魔”“地獄”という言葉は、自分中心の世界では使って遊んでいたが、徐々に教師や友達との関わりの中で相手を攻撃する言葉として使うようになってきた。
- M男にとっては集団生活での様々なルールを教えていくことは、まず相手の気持ちになって物事を考えるということから一緒に考え伝えていかなければならない。教師の気持ちを率直に述べたことがそのきっかけになったのだろうか。

表－4．友達の気持ちの理解：キャンプ（7月）

M男の姿	周りの幼児の姿	教師の援助	親との関わり		反省・省察
			親とM男	親と教師	
・キャンプの話を聞く	先生や友達とキャンプの話をする。				キャンプに行くことをとても楽しみにしているようだ。
・キャンプ場入り口にあるトーテムポールに興味を持つ。		トーテムポール(みんなのことを守ってくれる山の神様)についてM男と話をする。			
・夜中、トイレのため起こされて機嫌が悪くなり泣き叫び暴れる。「こんなつまんないホテル燃やしてやる。」と繰り返す。	トイレに行った後も静かに寝ている。	M男の気のすむまで話を聞く。		母親が心配し、指定の時間に必ず起こしてトイレに行かせてほしいと、事前に教師に頼んでいた。	よく寝ているので起こすのをためらったが、万一失敗した時の母親の反応を考えて起こした。寝ている所を起こされて機嫌が悪いのだろう。
教師と一緒にお茶を飲みに行き二人だけで話しをする。「本当は早くおうちに帰りたいんだ。」と話し教師の話しにも少しずつ納得する。		みんなもM男と同じ気持ちであるという事や泣きたくても我慢している事を伝える。			本当は家や母親が恋しくなったのだろう。ゆっくり話を聞いてみよう。 みんなもM男と同じ気持ちという事を伝えて行きたい。
トーテムポールに「早くお日様が昇って明日になりますように。」とお願いし寝る。		M男と一緒にトーテムポールにお願いする。			

・朝食をしっかり食べバスの中でもぐっすり眠って、元気よくバスを降りる。 「もうすぐお母さんに会える。」と元気に園まで歩く。		二日間よく頑張った事を誉める。	M男の頑張りを誉める。	キャンプでの様子を母親に伝えたかったが、さっさと帰ってしまったので、頑張ったM男を誉めてもらうよう電話でお願いした。「キャンプは楽しかった。」とM男が言っているという母親の言葉があった。	M男なりに二日間よく頑張っていたし我慢もしていたのだろう。母親がすぐ帰ってしまったのは、M男のトラブルを予期して、それを教師から聞きたくなかったようだ。

- 身の回りのことは出来ないがそれなりに色々な活動を積極的に行い、キャンプ生活を楽しんでいたようだ。集団生活の中での友達との関わりへのM男の自信につながっていくことを願う。
- みんなも自分と同じ気持ちということを知り安心もし、また、M男なりに自分も頑張らなければと思ったようで我慢をしていたようだ。自分の思っていることを全部話せたことで気持ちも落ち着き、教師の話も素直に聞き入れ受けとめてくれた。まずM男の気分を落ち着かせることが大切である。
- 夜中に泣き暴れたことは事前の母親の依頼を意識したことがきっかけの一つであった。キャンプが終わって迎えに来た母親達は二日間の様子を教師に聞いてから帰って行ったが、M男の母親はサッサと帰って行った。M男のさまざまな面に、母親が直接間接に大きく影響しているのではないだろうか。

表－5．自分中心の世界への退却と反省：運動会の練習（9～10月）

M男の姿	周りの幼児の姿	教師の援助	親との関わり		反省・省察
			親とM男	親と教師	
・組体操の練習をするが、すぐに「疲れた。」「めんどくさい。」と言って寝転んだりツバを吐いたりする。 教師に対しても「やかましい。」と言って舌打ちをする。	汗をかきながら頑張って練習している。 「M君もいっしょにしよう。」「M君もちゃんとしてよ。」と口々に声をかけている。	練習態度については厳しく注意する。 頑張って参加している時は「今のポーズ格好よかったよ。」「よくがんばったね。」と誉めた。	「できなくてもいいから頑張ったらそれでいいのよ。」とM男に話している。	「今日は○○ができてんてね。すごいなぁ。」などとできた事を具体的に誉めてもらうようにお願いする。	体型の事が理由でできないのは仕方ないので言葉がけに気をつけたいと思う。 母親の「できなくてもいいから..」という言葉には、どうせできないという思いもあり、M男は“しなくてもいい”と思っているのかもしれない。やる前からこう言われるとやる気もなくなるだろう。
・「どうして同じ事ばかりするんだ。」「どうせ僕は何もできないんだ。」と言って参加しない。	次からつぎへと新しい型が出来上がり、楽しみながら取り組んでいる。 M男が参加しないとピラミッドが出来ないので困っている。	どうして繰り返し練習するのかM男と話す。教師「M君はお化けの事をよく知っているでしょう。どうして？」			繰り返しの練習に対しては、単調にならないように、意欲を持続させるよう工夫しなければと思う。

		M男「それは何回も同じテレビを観たり本を読んだりしているからいつの間にか覚える事ができるんだ。」教師「運動会の練習も同じだと思うな。」 M男「そうか何回も練習して覚えてみんなに教えてあげたり発表したりするのか。」とM男なりに納得している。			興味や関心のあることを通じて話を聞かせ、自分で納得できるよう気づかせたい。
・教師の話を素直に聞く事ができ「何回も練習するから覚える事ができるのか。」と納得し、友達に教えてあげている。 ・時々「疲れた。」と言うがM男なりに積極的に練習に参加するようになってきた。				M男が納得し理解してくれた事や、積極的に練習に参加している事を伝える。	できない事もあるが成功した喜びとやり遂げた満足感や充実感をより多く味あわせていきたい。

・体型のことを気にかけM男への言葉がけに気をつけていたつもりだが、みんなと同じように参加させたいという願いが強くなりM男に対し厳しくなりすぎていたように思う。

・目先の行事にとらわれ、教師自身の心のゆとりのなさでひとりひとりを大切にした援助ができていなかったと反省し、M男との関わり方について考えなおす。M男の興味や関心のある事柄を通じて、自分以外の人の考え方を納得できたのではないだろうか。

・徐々に友達と関われるようになってきたが、まだまだ自分中心の世界に後戻りすることも多いようだ。母親との関係に注意しながら、他者の気持ちを理解できるようになることを目指したい。

表－6．友達との主体的関わり：キンダーフェスティバルの準備（11～12月）

M男の姿	周りの幼児の姿	教師の援助	親との関わり		反省・省察
			親とM男	親と教師	
・キンダーフェスティバルの合奏の練習には、あまり興味がなく参加しようとしない。			母親があまり好ましく思ってない子とは遊んで欲しくないようで「K君と遊んでいいけど、F君とY君とは遊んではダメ。」と話している。	教師にも、関わらせないようにして欲しいと数名の名があがった。もう少し様子を見てもらうようお願いする。	
・劇の練習には興味を持ち張り切って参加している。					1学期から「やりたい」と言っていた役だったので、とても張り切っているのだろう。
・同じ役のK男が長期欠席の為、M男が一人でセリフを言ったりしなければならなかった。「僕が頑張って覚えてK君に教えてあげるんだ。」	「M君、一人やのにすごいなぁ。」「上手にセリフいうなぁ」「格好いいなぁ。」とM男の事を誉める。	友達と一緒にM男の事を認め誉める。			友達に誉められ少しずつ自信や積極性もみられてきているので、もっと友達同士で認め合ったりできるよう、教師は見まもり子供達の声を大切にしよう。

・友達や先生に誉めてもらい、嬉しそうにしている。 ・キンダーフェスティバル当日は一人ですることになったが、最後まで堂々と発表する。	「M君上手やから僕拍手するわ。」とのF男の発言で、みんながM男に拍手をする。	「みんなM君の事をよく見てくれてるね。」「拍手してくれてやさしいね。」とM男にも友達のよい所を伝える。	M男はY男やF男とも遊びたいが、母親にダメと言われているのでなかなか遊ぶことができない。	劇の練習の様子や友達との関係を話す。特にM男とF男の様子も詳しく話す。	F男に話そうとして口を押さえて止めたりしている。母親の言葉を思い出しているのだろうと思う。 最後までやり遂げた事の満足感や充実感はM男にとって大きな自信につながると思う。

・M男の好きな活動ということもあり、劇の練習には張り切って参加し積極的に取り組んでいた。友達や教師に誉められたり認められたりしたことで自信にもつながったようだ。

・母親がM男の友達関係を制約している面もみられるが、劇の練習を通して仲間意識も芽生てきたようである。その後の自由遊びで友達と主体的に関わる姿がよくみられた。

表－7．友達の理解と交流に向けて：折紙製作でのトラブル（2月）

M男の姿	周りの幼児の姿	教師の援助	親との関わり		反省・省察
			親とM男	親と教師	
・友達と遊ぶ事が楽しくて積極的に関わろうとする。	M男が登園してくるのを待ち一緒に遊ぶ。	友達と楽しく遊ぶM男の姿を見まもる。		2学期後半から友達と積極的に関わるようになってきている事や、最近のM男の様子を話す。 教師の話を聞きM男の成長ぶりに喜ぶ。	頑張り過ぎてストレスがたまっていないだろうか。
・折紙製作中U男とぶつかり顔を打ってしまう。「謝っても許してやるもんか、一生恨んでやる。」	突然M男が大声で叫んだのでみんな驚いてシーンとなる。	しばらく様子を見ていたが、M男がU男を叩こうとしたので止めに入る。			最近のM男の様子から想像もつかない、どうしたのだろう。
教師や友達の言葉がけにも耳を貸そうとしない。	U男はずっと謝っている。 他児は「M君痛そう。」「U君が謝ってるから許してあげたらいいのに。」と声をかける。	「痛かったね。こんなに赤くなって..」と声をかけ、M男の顔をなでながら気持ちがおさまるのを待つ。			まずは「痛い」という気持ちを受け止め不安を取り除き、気持ちを落ち着かせよう。
「痛かったね」と教師に顔をなでてもらった瞬間「そうなんだ痛くて我慢できなかったんだ。」と言って泣き出す。		M男が話をしてくれるまで何も聞かずM男の手を握りながらそばにいた。			M男の気持ちがおさまるまで好きにさせてあげたいと思う。
泣きながら教師の話を聞いていたが教師の手を強く握り返しながら話し始める。		"二人だけの秘密の場所" に行きM男の話を聞いたり話合う。	母親が時々M男に「全部悪いのはM君よ。」「謝ったからいいでしょ。」「何もできないのね。」「なさけないわ。」など言っている。		話の中に「僕が全部悪いんだ、それでいいじゃないか。」と言っているがどうしてだろう。
保育室に戻りU男と話をする。 「U君さっきは本当にごめんね。」	U男「M君ごめんね。」 他児は仲直りする二人を見ている。	上手に言えた事を誉め仲直りができた事を喜ぶ。		母親に折紙製作の時の様子を話し家での様子を聞くが特に変わった事はないようである。	本当は分かっているのだろう。でもどうやって伝えればいいのかわからないのだろう。これからもM男と一緒に考えていこう。

- 4月の頃に比べれば、随分と友達の気持ちを思いやり関わりを持てるようになって来たが、その中でM男は無理をしている部分があったのではないだろうか。
- “僕が全部悪い、謝ればそれでいい”という言葉を聞いた時、気がつかないうちに教師や周りの者がそういう考えをさせていたのではないだろうか。接し方について考え直さなければならない。
- 教師の話を受け入れてもらうためには、子どもの気持ちが安定していなければならない。不安や心配事を一つずつ取り除くことが大切である。教師自身の心のゆとりが必要である。

表－8．友達との心の交流：卒園式（3月）

M男の姿	周りの幼児の姿	教師の援助	親との関わり		反省・省察
			親とM男	親と教師	
・玩具の貸し借りなどでトラブルが生じても、自分で解決できるようになってきている。				M男の最近の友達関係や遊びについて話したり、一年間を振り返りM男の成長したところなどについて話し、母親と一緒に喜ぶ。	
・卒園式の練習をする		とても行儀よく頑張っている事を認め練習が終わってからも何回も誉めた。			
卒園が近づくにつれて友達との会話や遊びが増え、“友達と一緒にする”ということを強く望み楽しむ。 給食時に「××君、一緒に食べよう。」 降園時に「××君、一緒に行こう。」	M男に誘ってもらって喜んでいる子や、M男より先に誘おうと玄関までM男を迎えに行く子もいる。				卒園が近づき少し寂しそうだ。言葉がけにも気をつけたい。
教師に「お友達と会えなくなるのが寂しいのだがどうすればいいのだろう。」と聞きに来る。		M男と一緒にどうすればいいか考え「うまく言えなくても思っている事をそのままお話してみたらどうかな。」と声をかける。			M男はいつの間に、こんなに上手に自分の気持ちを伝える事ができるようになったのだろう。
・卒園式の日、自分の思っている事を友達みんなに話す。 「一緒に遊んでくれてありがとう！とっても楽しかったよ！！」	M男の言葉に照れている子や卒園しても遊ぶ約束をしている子もいる。	上手に言えた事を誉めみんなも喜んでいた事や、言いたかった事が言えた事を、M男と一緒に喜ぶ。	M男と友達の写真を撮ったり、話ししたりしているが、母親が好ましく思っていない子には、自分はもちろんM男にも近づけさせない。		この一年間でM男は、“友達を大切にする。”という事を知る事ができたのだろう。

- M男がこの一年間でこんなに友達と仲良くなれたこと、友達を大切に思えるようになったこと、また自分の気持ちを相手に上手に伝えられるようになったことがとても嬉しい。
- 行事や日々の生活を通じていろんな壁にぶつかりながらM男は自分なりの方法で問題を解決し、遊びや生活を楽しんできたように思う。目先のことにとらわれず、教師自身がゆったりとした気持ちで子どもの成長を見まもっていかなければならない。

＜考察＞

1．　1学期

教室までやって来る母親に、いろいろ世話をしてもらっているM男。全く自分からやろうとする気持ちがなく、してもらうのが当たり前になってしまっている。おばけ・魔法など自分の好きな世界で一人で遊んでおり、友達からM男に関わろうとしても、自分の興味のあること以外は拒否してしまうので、回りの子ども達は戸惑いを示していた。拒否の仕方は全く無視か、『悪魔』『地獄』『火を付ける』などの言葉で表現し暴れる。M男には自分の言葉や行為が他人にどんな気持ちにさせるのかわかっていないのだろう。まずM男の気持ちや思いを受け止めたうえで、いろいろな場面を捉えて、相手にも思いがあること又相手の気持ちに気づくように取り組んだ。なかなか理解出来ないが、教師の素直な気持ちをM男に伝えたことで、少し気づいてくれたように思った。M男が色々なことを知っていること、又友達の前で発表するのが好きであることを捉え、質問コーナーを作って友達との関わり合う場面を多く作った。自分の話を楽しく聞いてくれる友達がいる、また、同じことに興味をもっている友達もいるということがわかり、会話も目立つようになって来た。M男は過保護過干渉の母親の影響がおおいに反映しているようなので、母親の気持ちを受け止めながら協力をお願いし、また機会があるごとにM男の様子を伝え、理解してもらえるようにした。

2．　2学期

運動会という大きな行事があり、教師は皆と同じように参加させたいとの思いが強く、M男に厳しくなり過ぎたようである。行事の前には教師は目先のことばかり気になり、教師自身の心のゆとりのなさで一人ひとりを大切にする援助が出来なかったと反省している。母親は、『出来なくてもいいから、頑張ったらいいのよ』とM男に話しているが『どうせ出来ないんだから』との気持ちがあり、それがM男に影響しているように思われる。M男の様子を伝えほめてもらうようにお願いをした。キンダーフェスティバルにおいては一学期からやりたかった役になり、欠席の友達の分まで張り切って練習し、当日も発表することが出来た。この行事を通して教師や友達にほめられ、認められたことで自信がつき仲間意識も見られるようになった。また友達と自分から関わっている姿が見られるようになって来た。

3．　1年間を通じて

自分の世界にこだわりがあり、教師や友達に邪魔にされたり妨げられたりすると、暴言を発して暴れたり怒ったりと、自分の感情を表現していたM男。教師はM男を丸ごと受け止めそしてM男の独自性を理解することを第一と考えた。又直面している問題の解決を援助していくには、目先のことにとらわれない教師自身の心のゆとりが大切であった。教師や友達との関わりの中で様々な葛藤や挫折を繰り返しながら、少しづつ友達にもそれぞれの思いを持っていて、自分とは異なる存在であることに気づき、友達の気持ちや思いも受け入れられるようになった。後ずさりや停滞を見せながらの発達ではあるが、一歩一歩成長したようである。卒園式日の『一緒に遊んでくれてありがとう。とても楽しかったよ』とのM男の言葉が物語っているように思われる。M男の姿を見ていると母親が大きく影響しているようで、母親の過

保護、過干渉がM男の友達への関心や関わりを妨げている面がある。機会があるごとにM男の姿を伝えM男の成長を共に喜んだ。母親との信頼関係を作り理解していただけるように心掛けたが、M男とは心のつながりは出来たように思われるが、しかし、母親はどこまで理解していただいたか少し疑問が残った。

B．Ｙ男のケース

＜実態＞

1　年齢　2年保育　4才児　　クラス人数　男１６名　女１２名　計２８名

2　学級集団全体の実態

- ３才児からの進級児１８名　新入園児１０名
- 元気があり活発でにぎやかなクラスである。
- 絵本の好きな子が多く、読んでほしいとの希望が多いので時間があれば絵本の読み聞かせをしている。
- 新入園児は、集団生活に戸惑いを見せているが、進級児がよく世話をしている。

3．個の実態

- 父　母　姉（年長児）　本人の４人家族
- 入園当初､母親と離れるときに大泣きをする。
- 家庭では近所の友達と、夕方まで外で戦いごっこをするほど活発さが見られるようであるが､幼稚園では友達の遊びを見ながら､部屋をウロウロし遊ばずに過ごしてる。
- 身の回りのことは、ほとんど自分で出来ない。

＜実践＞

1.表－９一人での遊び：園での生活の様子（５月）

Ｙ男の姿	周りの幼児の姿	教師の援助	反省・省察
・友達がパソコンで遊んでいる姿を見ながら、部屋をうろうろし遊ばずに過ごす。	パソコンを使って遊んでいる子、積み木を使って遊んでいる子、ブロックを使って遊んでいる子などさまざまである。	Ｙ男の様子を見まもる。	
ブロックや積み木には興味を示さず、首を横にふって離れて行ってしまう。		Ｙ男が遊びたくなるように積み木やブロックを渡す。	Ｙ男が遊びたいのではと思い、遊具を与える。
やはり、首を横にふって離れてしまう。		パソコン遊びに誘ってみる。	Ｙ男が遊びたいのは別の遊具なのだろうか。
部屋をうろうろし、遊ばずに過ごす。		しばらくＹ男の様子を見まもる。	Ｙ男は今、何がしたいのかもう一度見まもることにする。
・トラックのミニカーを見つけ、それで一人で遊び始める。	「あのトラック､僕が先に使ってたのにＹ君が取った。」とＡ男が教師に伝えにくる。	今日だけＹ男に貸してくれるようＡ男に頼み、そのままＹ男が使うことになる。	せっかくＹ男が遊びに興味を持ち始めたのでそのまま続けさせてあげたい。
他の場所へ歩いて行き、しばらくしてもとのところに戻ってくるが、トラックのミニカーが見当たらない。	Ｂ男が使って遊んでいる。		
Ｂ男をじっと見ている。	Ｙ男に気づいた女の子が「それ、さっきＹ君が使ってたから､貸しあげたら？かわいそうやん。」と声を掛ける。	Ｙ男と他の子供たちの様子を見まもる。	貸してほしいのだが言えずに見ているのだろうか。
何も言わず受け取り、遊び始める。	Ｂ男が「いいよ」と言って、Ｙ男にトラックを貸してあげた。		これがきっかけになり、自分の遊び場を見つけることが出来れば、また、友達との会話のきっかけになればと思う。

・この頃から泣かずに登園するようになる。自分が安心できる場所を見つけることができ、ようやく園生活も落ち着いてきたよう。身支度はまだ、自分で出来ないことが多いのだが、やってみようとする意欲が持てるよう、進めていきたい。

・家庭訪問の際、園での様子とは全く違うＹ男の活発な姿を見たり、近所の年長の男児とよく遊んでいるという母親の話を聞いて、早く園でも友達とも関わって遊べるようになるよう援助しようとしたが、少し焦ったきらいがあったと反省する。

・まだ園では１人でようやく遊べるようになった段階のようである。Ｙ男が自発的に友達と遊びたいと思う時を見定めていこうと考える。

２．表－１０友達との受動的な関わり：戦いごっこ（６月）

Ｙ男の姿	周りの幼児の姿	教師の援助	反省・省察
・友達の様子を見ながら、トラックのミニカーだけでなく、粘土やパソコンを使って遊ぶ。	それぞれの遊びを楽しむ。Ｙ男に対してあまり関心がない。	Ｙ男も一人遊びが満喫出来るよういろんな遊具を出しておく。	
・しばらくして、友達の戦いごっこをじっと見る。	数名の男児が戦いごっこをして遊ぶ。	Ｙ男の様子を見まもる。	友達の戦いごっこに興味を示しているが、自分から仲間に入れてもらうことは出来ないようだ。
首を横に振って、離れて行く。	「Ｙ君、遊ぼう。」「一緒にしよう。」	Ｙ男も仲間に入れてもらえるよう男児たちに声をかけ、男児たちの方から誘ってもらうようにする。	これが友達と関わって遊ぶきっかけになればと、期待する。Ｙ男に自分から声をかけるよう促すよりも、友達から誘われる方がスムーズに遊びに加われるのではと考える。
少し離れた場所から、友達の戦いごっこの様子を見ている。	再び、戦いごっこをして遊び始める。		
貸してもらったブロックを持ったまま、男児たちの様子を見ている。	「一緒にしよう。」「この武器、使ってもいいで。」と言ってブロックで作った武器をＹ男に貸してあげる。	しばらく時間をあけ、もう一度男児たちにＹ男に声をかけてもらうようにする。	Ｙ男にもう少し遊びを傍観する時間をあたえてから、もう一度誘ってもらおうと考える。
・友達と戦いごっこをして遊ぶ。	Ｙ男と一緒に戦いごっこをして遊ぶ。	Ｙ男たちの遊ぶ様子を見まもる。	ようやくＹ男が友達と遊ぶ姿を見て嬉しく思う。
「うん、わかった。」「パパーン」などと言いながら嬉しそうにポーズをとったりしている。	「Ｙ君は○○する役な。」「向こうからしか出てきたらあかんで。」「ビーってしたら倒れやんなあかんで。」		Ｙ男は命令されたり、倒されたりする役が多く、言われるままに遊んでいるが、初めて自発的な言葉が出てきて、とても楽しいようだ。
時には友達と絡み合ったり、瞰られたりしながら遊ぶ。	Ｙ男とも絡み合ったり、瞰ったり瞰られたりして一緒に遊ぶ。	だれか一人を集中して攻撃したりけがをしたりしないように、気を付けながら見まもる。様子を見て時々「強いね」とＹ男に声をかける。	意地悪をしている様子はどの子にも見られず、Ｙ男も遊びを満喫しているようだったので、ハードな動きが多いが、あまり注意せず見まもることにする。
少し離れたところに立って見ているが、そこでもポーズを取ったりしている。	「Ｙ君はまだ小さいから、強くしたらすぐ泣くかもしれへんで。」「ちょっとそっちの方でみとき。」Ｙ男以外の子は絡み合って遊びを続け、楽しんでいる。	一人外されたＹ男の様子を見まもる。	外されてもＹ男はあまり気にしている様子もなく、むしろ、離れた場所にいても一緒に遊んでいる気分を味わい、楽しんでいるように見られる。

- 全くの一人遊びから徐々に友達を意識し始めたようだ。Ｙ男が大好きな戦いごっこに興味をしめしたので、教師はこのチャンスに何とか少しでもＹ男が遊びに参加出来るように援助したいと思い、男児たちに声をかけるが、Ｙ男は乗ってこなかった。このときのＹ男には、遊びに参加することよりも、遊びを傍観することの方が必要だったようである。
- Ｙ男は興味をもった活動でも「充電期間」を過ぎないと動かないようだ。Ｙ男が最も熟した気持ちになっているか、いま何を欲しているのかを見極め、それに対して援助していくことが必要であると考えさせられた。
- 遊びにしても、身支度にしても、製作にしても、「Ｙ君はまだ小さいから、手伝ってあげるわ。」「Ｙ君はまだ小さいから、はさみもあんまり上手に使われへんねんなあ。」という友達の言葉が、教師には少し気になり始めた。親切にしたり、気にかけてくれたりすることは嬉しいのだが、“Ｙ男は小さい子”という見方が間違っているのでは…と疑問に思うようになった。身支度を手伝ってもらうことも、友達との関わりの糸口になればと思っていたのだが、かえって“Ｙ男は小さい子”というイメージを与えてしまったのかもしれない。Ｙ男のよさを認め、“Ｙ男が出来るようになったこと”を強調して関わることによって、Ｙ男の成長は勿論、クラスの子ども達のＹ男への見方にも心をかけて取り組んでいきたい。

３．表－１１友達への一方的な関わり：Ｋ男への関心（６月）

Ｙ男の姿	周りの幼児の姿	教師の援助	反省・省察
・Ｋ男のそばへ座り、ブロックで遊ぶ。	Ｋ男は一人でブロック遊びを楽しむ。		
・ブロックで作った拳銃を使ってＫ男と遊ぼうとするが、Ｋ男は乗ってこない。	Ｙ男にはあまり興味がないようで一人ブロックで遊び続ける。	Ｙ男とＫ男の様子を見まもる	Ｙ男から興味を示し、言葉ではないが、自分から誘っている姿に嬉しく思う。
しばらくして、ブロック遊びをやめたＫ男を見つけ、戦いごっこをしようと突かかっていく。	Ｋ男は訳が分からず、「やめて。」と言いＹ男から離れる。		
それでもＹ男はＫ男と遊びたくてかかっていく。	Ｋ男は教師に「Ｙ君がたたいてくる。」と助けを求めてくる。	Ｙ男には、突然かかって行くとＫ男が嫌がるので、一言声をかけるよう促す。 Ｋ男には、Ｙ男は意地悪をしたのではなく、Ｋ男と遊びたかっただけであることを伝える。	Ｙ男とＫ男が仲良くし、お互いに良い影響を与えあえるといいのだが。
しばらくの間はＫ男と離れているが、またすぐにＫ男の側へ行き、抱きついたりしようとする。	一人で遊びたいのにＹ男がくっついてくるので困っている。	Ｋ男が困っているので、「Ｋ君はブロックで遊びたいんだって。」「戦いはしたくないんだって。」とＫ男の気持ちをＹ男に伝える。	Ｙ男の気持ちも分かるが、Ｋ男が嫌な気分を味わわないよう、またＹ男の事を誤解し、嫌いにならないよう、あえてＹ男に注意する。

- Ｙ男にとって、一人の気になる友達Ｋ男ができる。Ｋ男もＹ男に身支度を手伝ってくれたりと、とても親切にしてくれる。Ｋ男はどちらかというと、おとなしい方で、戦いごっこが嫌いで、ブロックを使ったり、女の子とおままごとをして遊んだりすることが好き。争いことが嫌いで、友達から嫌なことをされてもなかなか“イヤ”と言えず、また、こうしたい、ああしたいと自己主張もあまりするほうではなく、争いことを避けて遊ぶ姿が多く

見られる。

- Y男にとってK男は、集団生活をするうえでの良いお手本でもあり、友達と関わって遊ぶきっかけでもある。また、K男にとってY男は、今は少し迷惑な存在ではあるが、これをきっかけに、少しずつ自己主張も出来、“イヤ”と言えるようになればと思う。Y男はK男の気持ちには無頓着であるとはいえ、Y男が主体的に友達に関わっていこうとするのはよいが、K男が嫌な思いをしないよう、時にはY男にも注意をしながら二人の様子を見まもっていきたい。

4．表－１２友達との関わりの停滞：朝の身支度と園庭遊び（９月）

Ｙ男の姿	周りの幼児の姿	教師の援助	反省・省察
・カバンをもったままで、着替えもまだ済ませていない。	身仕度を済ませ、自分の席に座っている。	Ｙ男の身仕度を促し、先に出席をとり始める。	
まだ、裏返しのスモックを片手にタオルを掛けに行く。	園庭へ出て行く。	園庭で遊ぶことを子供たちに伝える。	
何も答えず、タオルを掛ける。		「Ｙ君、着替え出来た？」	
「いい。自分で出来る。」と言って、着替え始める。		「みんな、外へ遊びに行ったよ。スモックのお着替え、手伝おうか？」	１学期には一度も聞いたことのないＹ男からの言葉だったので、びっくりしたが、嬉しかった。
スモックの着替えに５分程かかり、ようやく終える。		手伝わず、励ましながら側で見ている。	
無表情で担任の顔を見て、担任と一緒に外へ出る。		「自分で出来てよかったね。」と誉めて、頭をなでる。Ｙ男と手をつないで玄関まで行く。	教師は嬉しくて、誉めたのだが、Ｙ男の無表情に少し戸惑う。玄関に行く間、たいした会話はなかったが、Ｙ男の表情も明るく見えた。
・靴は履き変えたがガラス戸の所に立ったまま遊ぼうとしない。	それぞれ、好きな遊びを見つけ、遊んでいる。		
何も答えず、誘いにも乗ってこない。		「Ｙ君は、何をして遊ぶ？」と声をかける。	
何かを見ながら、しばらく窓ガラスの所で過ごす。		必要以上に声を掛けることをせず様子を見ることにする。	Ｙ男は、友だちが遊んでいるのを傍観しながら何をしようかと考えている様子なので、それを見極めるため、少し時間をあける。
砂場で一人で遊び始める。スコップを使って、小さな山をつくり、穴を掘っている。			
隣の子の真似をしながら、穴を掘る。		Ｙ男の側で遊んでいるグループに参加して遊ぶ。	
「いらない」と言い、黙々と山を作り、穴を掘る。		隣のグループで遊びながら、「お碗やザルも使っていいよ。」と、遊具を側に置く。	隣の子と同じ遊びが出来るようにと思い、遊具を差し出してみる。
他の子が砂場で、川作りを始めたのをじっと見ている。	数人の子供たちが砂場で川を作り水を一生懸命運んでいる。	しばらくの間、Ｙ男の様子を見守る。	Ｙ男はきっと一緒に遊びたいのだろうと考える。
何も言わず、また山を作り、穴を掘っている。	「Ｙ君も一緒にする？」とＹ男を誘う。	少し時間を置いた後、川を作っていた子供たちに、Ｙ男も仲間に入れてくれるような声を掛け、誘ってもらう。	そろそろＹ男に、他の子供たちと一緒に遊ぶ機会を作ってもよいのではと考えたが、まだ、Ｙ男には一緒に遊ぶのは早かったようだ。

- １学期には一人で着替えたことがほとんどなかったＹ男が、初めて「自分でする」と言ってくれた。いつも手伝ってくれていた友達が、今日は先に行ってしまったこともきっかけとなったのかもしれないが、Ｙ男の意欲をみることが出来、とても嬉しかった。また、“一人でも出来るんだ”といったＹ男の自信も感じられた。きっと夏休み中に家庭でも練習してくださっていたのだろうと思う。
- Ｙ男は、いつものように他の子どもたちの遊びを傍観した後、一人で砂遊びを始めたが、隣の子どもたちが気になるようで真似をしながら遊んでいる。友達と関わるよい機会と思い、遊具を差し出したが拒否され、隣の友達に誘ってもらうがこれも拒否された。このとき、Ｙ男にとっては、まだ、傍観が重要だったのかもしれない。また、教師も“Ｙ男の遊び”よりも、Ｙ男の“友達との関わり”の方を重視し過ぎていたため、Ｙ男の思いを理解出来なかったのかもしれない。教師の思いが強すぎたようで、もう少しゆっくり接してゆくべきであった。

５．表－１３主体的な関わりでの葛藤：Ｋ男とのトラブル（10～12月）

Ｙ男の姿	周りの幼児の姿	教師の援助	反省・省察
・Ｙ男が水筒をぶつけたから噛んだ、と答える。	自分は何もして居ないのに、Ｙ男が背中を噛んできたと言う。	Ｙ男の母親から、数日前にＫ男がＹ男に背中を噛まれたと聞き、教師はこのことについて全く知らなかったので、子供たちにも事情を聴いた。友達を噛んではいけないことを話し、注意した。 Ｙ男の母親にも連絡する。Ｋ男の母親にも再度連絡し、今回の事情をＹ男の母親にも連絡したことを伝え、また、Ｙ男はＫ男が好きで一緒に遊びたいのだがうまく表現出来ない事があることも伝える。	一緒に遊んでいたときに、Ｋ男が持っていた水筒がＹ男に当たってしまったらしい。 Ｙ男とＫ男にお互いのわだかまりが残らないよう、二人の様子に気をつけて、しばらく様子をみることにする。
・一方的にＫ男をたたきながら追いかけまわす。 「……」 「……」 「うん。」 「ううん。」 「ううん。」 「うん。」	Ｙ男が「Ｙ君がたたいてくる。」と訴えて来る。 「僕は遊びたくないのにたたいてくるねん。」 「Ｙ君たたくな。」	Ｋ男がＹ男に直接自分の気持ちを表現するよう促す。 「Ｋ君はＹ君に何もしていないの？」 「Ｋ君はＹ君にどうして欲しいの？」 「いやだったらいややって自分で言っておいで。先生がここで見ていてあげるから。」 「Ｙ君、Ｋ君が何か言ってた？」 「たたかないでって言ってなかった？」 「Ｙ君、たたかれるの好き？」 「Ｋ君もたたかれるのいやだってＹ君がＫ君をたたいたら、Ｋ君はＹ君のこと嫌いになるかもしれへんよ。それでもいいの？」 「Ｋ君と一緒に遊びたかったら、もうたたくのはやめとこうな。」	Ｋ男が自分の気持ちを相手に伝えるよいチャンスだと考える。 Ｋ男が自分の気持ちを伝えやすいように力づけた。 Ｋ男の気持ちがよく分かるようＹ男に話し、Ｙ男も少し分かったようだ。
・相変わらずＫ男に近寄って行って、Ｋ男に「あっちいって。」と言われたり、叩かれたりすることも多い。 Ｋ男の反応がＹ男には嬉しくてめげずにますます近寄っていく。	Ｋ男がＹ男に対してやり返すという形で、Ｙ男を追いかけたりするようになる。	Ｋ男にもＹ男にも叩いたりすることについては、時々注意もする。	お互い楽しそうにしているので、今はしばらく様子を見ている。

- K男は、Y男が主体的に関わりをもとうとした最初の友達であったが、このトラブルでK男がY男のことを嫌いにならないだろうかと不安であった。もし水筒が当たったときにK男が先に謝っていれば、また、もし水筒が当たったときにY男が言葉で表現していれば、噛むことも噛まれることもなかったかもしれない。また、噛むことはいけないが、水筒が当たったときのY男の痛さも理解したい。嫌なことを“イヤ”とはっきり言うことの大切さを二人に分かってほしい。Y男にもK男にも、お互いは成長するのに必要な存在だと思うので、今後も一緒に遊んでほしい。
- K男が今までと違い、Y男に対しても言い返したり、やり返したりするようになった。始めはY男もびっくりしていたが、戦いごっこの大好きなY男は、かかってくるK男と遊んでいるつもりで楽しんでいる。K男も今までとは違って、少し楽しんでいるようにもみえる。お互いに相手の主張や気持ちが分かりだしたのだろうか。
- 二人は互いに必要な存在であることを、保護者の方にも理解していただく必要がある。だが、水筒のトラブルの時、K男の母親にはあまり理解してもらえず、Y男とはあまり遊ばせたくないと言われる。嫌なことがあっても、K男は言い返したり出来ないことが心配のよう。その後、K男の変化について話すと、いじめられてはいないということと、“イヤ”と言えるようになったということに安心を示して下さり、今まで程Y男を意識されなくなった。一方、Y男の母親はあまり反応がなかったのが少し気がかりである。

6．表－14主体的関わりの深まり：朝の身支度の様子・作品展製作（1・2月）

Y男の姿	周りの幼児の姿	教師の援助	反省・省察
・少し遅めに登園したが、急ぐ様子もなく友達の様子を見ながら自分で着替える。	朝の会があるため、登園した子から自分で着替えを済ませ、園庭へ出て行く。	Y男や残っている子供たちに、声を掛け、急いで着替えるようにする。	
友達と会話したり、友達を観察していたりするので着替えがなかなかすすまない。		マラソン練習の時間も迫っているのでY男の着替えを手伝おうかと思ったが、もう少し我慢して、声を掛けるだけにする。	せっかく自分で出来るようになってきたのだから、他の子と同じように頑張ってほしい。
「S(呼び捨て)、待って。」と答え、少し急いで着替えを始める。	S男が「Y君、一緒に行こう。」と声を掛ける。		
「ううん、いらない。」		「Y君、先生は先に外へ行くけど着替えを手伝おうか？」と聞く。	きっとS君の手前、自分ですると言ってくれるだろうと予想する。
「うん。」		「じゃあ、着替えが出来たら降りてきてね。」 「S君、よろしくね。」	
・Y男はS男を含めた5人のグループに入る。	共同製作をするためのグループを作る。	グループに入れない子がいないか確認する。	
	家を作るための材料を探す。 「この箱をこうやって使ったらえんとつになるよ。」	Y男たちの製作の様子を見まもる	Y男は、友達に言われたように動く事が多いが、製作に十分参加し、楽しそうに活動しているように見える。
「うん、いいよ。」と言って、セロチープを取りに行く。	「Y君、セロテープ取って来て。」		

箱を押さえている。	「Y君、これくっつけるから、ちょっと持ってて。」		
みんなと一緒に製作するための材料を探す。	みんなで相談しながら、製作するための材料を探す。	材料さがしのアドバイスをする。	Y君が相談に参加し、イメージをふくらませて、自分の意見を言っている事に嬉しく思う。またこの５人の友達関係が対等であることがうかがえる。
教師にすすめられ、ビールのキャップを見つける。 「これをここに付けたら屋根の模様になるよ。」 「うん、かっこいいやん。」	「それいいなぁ、僕も一緒にするわ。」 「これでいいとおもう？」		
「ホントや、階段や。」	「Y君見て、階段出来たよ。」		

- 衣服の着脱など自分で出来るようにはなったが、ペースはまだまだ他の子よりも遅く時間がかかる。出来るだけＹ男のペースに合わせてあげたいとは思うが、全園児での活動となるとなかなか難しく、つい教師が手を出してしまいそうになるが、声をかけるだけにした。今回はＳ男がＹ男に声を掛けてくれたので、Ｙ男には喜びになり、支度も急いでしようとした。Ｙ男とＳ男は２学期後半頃から仲良く遊ぶようになり、Ｓ男はＹ男にとって大きな存在である。Ｓ男からＹ男に声を掛けたり、Ｙ男がＳ男のことを呼び捨てにしたりする様子から、友達関係が出来てきたことを感じた。
- ２学期後半頃から友達と遊ぶ機会もぐんと増えたが、グループ作りにうまく入ることが出来るかどうか、とても心配だった。教師の心配もよそに、Ｓ男からも誘われ、すぐにグループを作ることが出来た。製作に入ると、初めのうちは友達から指示されることが多かったのが、自分の意見も言い、友達とも対等に、また、協力して取り組む姿が見られた。周りの子どもたちのＹ男に対する意識が少しずつ変わってきたようにも見えて嬉しかった。

＜考察＞

１．１学期

入園当初、泣いて母親から離れず、身支度も一人では出来ず、園生活に慣れるのに時間がかかったＹ男。まずは泣かずに登園出来るようにと、他のクラスの教師も協力しながら進めた。次に、園で遊ぶ楽しさが感じられると共に、基本的生活習慣についても一人で取り組めるように心掛けた。又、家庭訪問時、楽しそうにおしゃべりして走り回ったりしている姿や、母親から『一日中友達と外で元気に遊んでいる』との話から、園でも友達と遊べると感じた為、教師はおもちゃを手渡したりすることが多くなってしまった。少し焦り過ぎたと反省し、Ｙ男の心に寄り添いながら、じっくり見守り、理解していかなければと思った。

その中で、“Ｙ君はまだ小さい子”という印象を与えてしまったようである。友達がＹ男の身支度を手伝ってくれたり、気にかけてくれる気持ちも、Ｙ男が友達と関わるきっかけになればと喜んでいたのだが、他の活動においても“小さいから出来ない”“Ｙ君には出来ないから手伝ってあげる”とＹ男の活動する場を奪っているようにも感じられた。又、“同じクラスの友達”としての意識より“小さい子”としての意識が強くなってきていることも気になった。

ようやく友達との関わりも見られるようになってきたので、Ｙ男を認めることでＹ男の成長

はもちろんだが、クラスの子ども達の意識の持ち方、与え方にも心掛けて取り組んで行きたいと思う。

2．2学期

2学期になり、基本的生活習慣は“自分でやってみよう”とする姿が見られ、一人での遊びから友達と遊ぶ姿が見られるようになってきた。しかし、まだまだ一人での遊びの場面も多い。そういうY男の姿を見て、Y男の遊びより友達との関わりの方を重視したため、教師の援助の空回りもあった。Y男をよく理解し、今何を思っているのだろう、どうしたいのだろうと心の動きを受け止め、教師の思いの先走りではなく、援助のタイミングを見極めて進めて行きたいと考えた。

自分の気持ちを言葉で表すのが苦手なため、友達との遊びの中で噛んだり蹴ったりのトラブルが起こった。友達とのトラブルの中で、言葉で表現することの大切さや友達の気持ちや思いを知らせ、たくさんの友達と関わって遊べるよう、またそうすることで、友達のY男への意識も“仲間”へと変わるように進めた。

3．1年間を通じて

入園当初は、ただウロウロし遊ばず友達の遊びを見ていたY男。心の安定が出来ると、教師は早く友達と一緒に遊び、楽しい幼稚園生活を送らせようとの思いが先走り、Y男への援助が空回りになった。Y男は時間がかかっても自分自身が納得するまで動かない子であることを受け止めたうえでの働きかけが必要であった。Y男の発達の姿や内面理解を見極めたうえでの、タイミングが大切である。

Y男は、一人遊びから一緒に遊びたいちょっと気になるK男が出来、一方的な関わりの中でいろいろなトラブルが起こるようになった。その機会を捉えて教師は、お互いの子どもの気持ちを代弁し、気持ちを伝えた。この経験で相手の気持ちに気づいたり、自分の思いや気持ちを伝えるには、言葉で表現しなくてはならないことなどがわかり、又K男は、自分の意志を相手に伝えることが出来るようになった。関わりあいながら子ども達は、お互い影響しあい成長しているのがよく理解出来た。呼び捨てで呼び合う仲間が出来、同じ目的で活動し、自分の思いを伝えあってる姿が見られるようになった。

周りの友達の意識も“小さい子”から“クラスの仲間”へと少しづつ変わって行った。　当初、『Y男は何も出来ない子』とクラスの子どもに位置付けしたのは、教師のY男への日々接する姿を通してだと思う。直接子どもに関わる教師は、子どもにとって良きモデルでなければならない。

Ⅲ．総合考察

集団生活の中で、自分らしさを発揮しながら友達と関わりを持ち幼稚園生活を送ろうとすると様々なトラブルや葛藤が起こる。教師や友達との関わりの中で子ども達が自分以外の存在を知り、相手の気持ちに気づき又相手の気持ちになることが大切だと考え、いろいろな経験や体験を通して自ら気づき、そして学んでいけるよう、機会をとらえて援助していった。

教師は子どもと共に生活しながら一人ひとりの子どもの心に寄り添い、子どもの言動や心の動きを温かく受け止め、一人ひとりの特性を見極めながら援助していくことが必要であると考える。

M男は、むつかしいことをいろいろ知っていること、また人前で発表するのが好きであること、そしておばけ・魔法等のM男独自の世界を持っていることや、母親の過保護・過干渉の影響等を見極めたうえでの援助が必要であった。Y男は、時間がかかっても自分自身が納得するまで動かない子であることを受け止めたうえでの働きが必要であった。

同時に、子どもは、停滞や後退しながら一歩一歩成長していることと、一人ひとりの子どもの発達が同じでないことをふまえたうえで援助していくことも大切である。

教師は、M男のことをよく理解した上で援助したつもりであったが、行事などがあると目先のことばかり気になりその子に応じた援助をすることが出来ず、教師が焦る傾向が見られた。Y男にしても、教師の早く友達と関わって楽しい幼稚園生活を送らせたいとの思いが先走りとなり、Y男への援助が空回りとなった。そうならないためには、その子を受け止めその子の特性を理解することが何よりも大切であると同時に、目先のことにとらわれない教師の心のゆとりが大切であった。

二人の子どもに対する教師の関わりから見られるように、一人ひとりの子どもに応じた援助をしていくには、今子どもは何を考え何を思っているか、また、どうしてそのような行動をするのか、何が育っているのだろうか等を洞察する教師の力が重要となってくる。そして子どもの人的環境となる教師は、良き子どものモデルとなるように感性豊かな人間として努力しなければならないと思う。

一方、子どもの成長にとって保護者の影響が大きいことは言うまでもない。教師は子どもを育てるだけでなく、保護者の啓蒙も教師の大切な役目であり、家庭との信頼関係を築きながら共通理解を深めて行くことが非常に大切であると考えられた。

この研究を通して教師の役割の重要性を感じた。これからも園内研修、講師を招いての園内研修、教師同士のカンファレンス、又機会あるごとに研修会に参加し、教師の質の向上に努力したい。

Summary

Nara University Attached Kindergarten places great importance on education forcusing on the total personality of each individual child. This paper reports the experiences and the teachesrs' handring of two cases over one year of day-car: Student M. who, overindulged by the mother and quite self-centered, didn't care for others; and Student Y, who found it difficult to join into group activities. Especially noted are the two children's personalities, changes in their relationships with the other children during the year, and how the teachers contributed to their development.

What was considered most important in the program is that the teachers spent time together closely with the children, accepted them as they were, and empathized with them, building a relationship based on trust. Also contributing to children's development was the detailed educational consideration and educational support suiting each child, whose course of development differed greatly from each other.

To understand each child's unique characteristics during infancy, it is necessary to observe carefully, devote time to each child, and attend to each child with a relaxed attitude. At the same time, it is important to build a relationship with the parents or gurdians based on mutual understanding, and for both to understand the child and support his or her development.